

多読通信

#1 英文多読を始めよう



1 なぜ英文多読なのか？

中学から大学 2 年まで 8 年間も学んだのに、英語を話せないと感じるに日本人は少なくありません。また、メディアでは「日本人は英語を読めるが、話せない」と表現されることもあります。

この文脈で見落とされている2点

見落とし 1

英語の知識(語彙、文法)は8年間学んだとしても、言葉としては使っていない

年間 100 時間として 800 時間を知識学習に費やしていたとしても、説明、理解は日本語で、ほとんどの時間は日本語で考えていますね？

英語に触れている(例えば、聞く、読む)時間は 2 割以下でしょう。(もっと少ないかも)

例えば 2 割なら、NHK のラジオ講座(各 15 分)を欠かさず聞き続けても、英語に触れる時間は 1 年で 12.5 時間(3 分×5 回×50 週)です。



見落とし 2

「話せない」ことよりも「聞けない」「読めない」ことの方が深刻

英会話で本当に困ったのは、自分の考えを発話できなかったことよりも、相手の話を聞き取れなかったことではありませんか？

また、児童書である「Harry Potter」を読み通せないとしたら、英文を読めるとは言えません。

「日本人は英文を訳せるが、読めない(聞き取れない、話せない)」が、適切な現状認識ではないでしょうか？

この状況を打開できるのが英文多読です。

そのポイントは、英文和訳を避けようとする事です。学校時代に行った語彙・文法学習も一旦脇に置き、和訳しなくても理解できるやさしい英文を読みます。

最初はさし絵や音の助けも借りながら、物語の世界に入り込み、主人公達と笑ったり、怒ったり、ちょっぴり悲しんだり、英語の世界での擬似体験を重ねます。

それでも一定期間(目安が 100 万語)続けると、気づかないうちに英文を楽に読めるようになっていくのです。



100 万語英語多読は、NPO 多言語多読理事の酒井邦秀先生が提唱され始めた英文読書法で、上記「多読三原則」に従って、やさしい英文から読み始めます。

多読三原則

- 1、辞書はひかない
- 2、わからないところは飛ばす
- 3、進まなくなったらやめる

補足すると



まず、読書中には辞書を引きません

多読では英文から直接内容を理解し、英語の世界に浸ることを目指しますが、辞書を引こうと思うと読書が中断され、日本語の世界に戻されてしまいます。

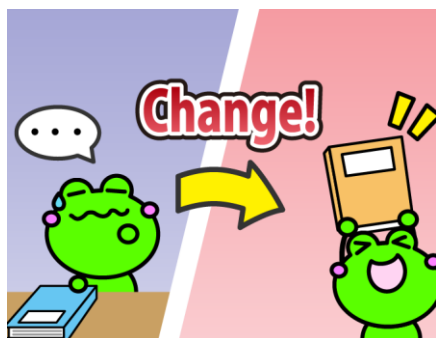
日本語訳を気にするのでなく、辞書を引かなくても楽しめる絵本から始めましょう。



物語が「わからない」理由は、知らない単語や表現が理由とは限りません

日本語の小説を読むときと同様に、知らない単語は気にせず読み飛ばして英文を読んでいきます。

和訳は気にせず、英文から直接情景を思い浮かべる読み方を目指しましょう。



それでも読書が進まないのは・・・

未知の語彙が多く難しく表現されている本、趣味に合わない本を選んだからです。

頑張って最後まで読み続けようとするのではなく、次の本（もっとやさしい本、趣味の合う本、背景知識のある本、おもしろいと思える本）に切り替えます。

このように、多読ではやさしい英語の本が大量に必要なため、図書館の活用が不可欠なのです。

Point 1

和訳と読書を区別する

英語を言葉として使うには、英語を（和訳せずに）読むことが不可欠です。和訳をせずとも英文を理解できることは、20 年の授業実践から明言できます。まずは、和訳からの卒業を目指しましょう。

Point 2

読書量は数百万語（数十万語では効果を期待できない）

英語を（和訳せずに）読めるようになるには、（日本語を避けて）英語に触れる時間を重ねる必要がありますが、その量は数百万語です。

目安となる 100 万語を毎分 100 語で読むと 170 時間かかります。毎日 30 分間、欠かさず読んで約 1 年かかります。

第一の実践ポイントは、読書量です。



Point 3

「分かる」テキストでないと効果を期待できない

日本語のようにナナメ読みはできなくとも、視線を戻さずに左から右に移しながら、意味を把握できるテキストでないと、読んでいるとは言えません。（さし絵をじっくり見る絵本は例外ですが）

ゆっくり読んだとしても、読書速度は毎分 80 から 100 語以上になります。構文を解析したり、和訳したりすれば当然、また、未知語、未知表現に、その都度止まっても、この速度は保てません。当然、「極めて」やさしい英文でないと、この読み方はできないことが分かります。

第二の実践ポイントは、英文の（極端な）やさしさです。大人も、絵本から始めるのが普通です。



「聞き読み」で英文和訳から卒業しよう

大量の絵本を読んで、「わからないところを飛ばす」多読の読み方に慣れてきたものの、英文を和訳してしまう癖が抜けないという方は、「聞き読み」をしましょう。

「聞き読み」では、CD 等を用いて、テキスト本文の朗読音声を聞きながら多読をします。
(聞きながら読む)



Point 4

朗読音声を途中でポーズすることなく、最初から最後まで通して聞き、そのペースに合わせてテキストを読みます。朗読音声は、あくまでペースメーカーとして利用し、内容把握はテキストでします。(音声から内容を把握しようとしなない)

最初は単語レベルの発音がテキストと朗読音声でずれることが気になるかもしれませんが、気にしません。聞き読みに慣れてくると朗読音声があった方が読みやすく感じられるようになります。朗読のペースに合わせて読むので、英文を日本語に翻訳している暇がありません。

最初は、800 語の英文を 10 分間(毎分 80 語のゆっくり朗読)で聞き読みするレベルから始めます。

20 年の英文多読授業実践で分かったこと

Point 5

豊田高専電気・電子システム工学科では、卒業生の英語運用能力を保証するため、2002 年 10 月から 5 年生の授業で英文多読を始めたところ、「英語に対する苦手意識が消えた」、「英文が楽しく読める」と好評だったため、2003 年度には、6 学年(本科 2～5 年と専攻科 1,2 年)で英文多読授業を始めました。

2009 年以降の専攻科 2 年生は 6～7 年多読授業を継続し、TOEIC 平均点も 550 点以上で推移しており*1、高専生は 7 年間で合計 300 時間*2 の英語使用時間で TOEIC600 点水準を達成できると推定しています。この多読授業の初期の様子は、『教室で読む英語 100 万語!』酒井・神田/著、大修館書店の p98 から 104 に書かれています。

*1 「高専生の英語運用能力改善に必要な英語使用時間の推定」
西澤他,工学教育, p49-54, 70-2, 2022.

*2 1 年間 30 週で計算すると、英語使用時間は毎週 1.4 時間